痴呆性高齢者に対するドッグセラピーの試み

真野充弘・内苑まどか・西村 健
実践・事例報告

痴呆性高齢者に対するドッグセラピーの試み

真野充弘**1, 内苑まどか**2, 西村 健**3

抄録

特別養護老人ホームに入所中のアルツハイマー病に罹患し、中等度痴呆を有する高齢者10名（男性2名、女性8名）にドッグセラピー（DT）を試みた。DTには、特別に訓練された治療犬を用い、毎週1回、毎回30分間、DTプログラムを行った。DTの効果の評価には、DT前後にN式精神機能検査およびGBSスケールを一部改変した日常行動観察表による評価を、毎回のDT中には本研究のために作成した行動観察表による評価を行った。その結果、N式精神機能検査ではDT後2名のみに、健康面での改善による2次的改善がみられた。日常行動観察では、DT後、7名に改善が認められ、特に、覚醒度、焦燥感、睡眠障害などのが改善が顕著であった。DT中の行動観察ではDT2〜3回目まではプログラムへの興味を示したが、以後はしるしに慣れや飽きが認められるようになった。この結果はプログラムを工夫し、興味を維持できれば、持続的にDTが痴呆性高齢者の日常生活の改善に役立つことを示唆している。

Key Words：ドッグセラピー、ケア、痴呆

総　言

わが国でも、最近アニマル・セラピーの言葉が頻繁に聞かれるようになってきた。アニマル・セラピーは、老人ホームや精神科病棟などの各種施設で、動物を飼ったりボランティアの人に動物を連れてきてもたらしたりする活動を通して、コミュニケーションの増進や各種の障害の改善に役立たせる治療法である†1。

アニマル・セラピーという用語も歴史的にかなり変遷してきている。現在、学術報告では一般的に、治療と評価を伴う場合には「動物介在療法」（animal assisted therapy:AAT）を、それらを伴わない場合には「動物介在活動」（animal assisted activities:AAA）という用語が用いられている。

動物介在療法の1つであるドッグセラピー（dog therapy:DT）に関する研究は、1970年代中ごろコーソン夫妻（Corson,S. & Corson,E.）†2,†3がオハウィオ州立病院で始めたのが最初である。コーソン夫妻は、社会性が低下している精神科入院患者にDTを行い、50名中47名の社会性の改善を報告した。また、老人ホームにおいてもDTを試み、施設利用者の自信の回復と、施設利用者同士および施設利用者と施設スタッフとの社会的相互作用の増加などの効果が認められたことを報告した。それ以後、さまざまな実践的活動が行われ、多くの報告がなされるようになってきた。

しかし、1980年ごろまでの研究は科学的な手順に基づく実験研究ではなく、臨床例の報告であった。そのため1980年代にはいり、治療効果の評価や、効果をもたらす要因の解析など、科学的な

受付日 2003.4.12／受理日 2003.8.8
*1 Mitsuhiro Mano：日本レスキュー協会
*2 Madoka Uchizono：甲子園大学大学院人間文化学部
*3 Tsuyoshi Nishimura：甲子園大学
*1 〒560-0021 大阪府豊中市本町4-1-24 アクティビール 2F

日本痴呆ケア学会誌、2(2)：150-157、2003

150
評価の必要性が強く意識されるようになった。

わが国でも1980年代の後半から動物介在活動は広く行われるようになってきたものの、治療目標を設定した動物介在療法はあまり行われてこなかった。その理由の一つとして、動物介在療法実施のための詳細な情報を得にくかったことがあげられる。近年、心理学、精神医学、獣医学、比較行動学などの分野から、AATに関する研究報告がなされつつあるが、それらの研究では、必ずしも治療効果の適切な方法による評価が行われているとは言い難い。DTの有効性についても、最近、計量的評価の成績が報告されるようになってきたが、さらに検証を重ね、評価を確実なものにしなければならない。

そのような状況のなかで、今回われわれは痴呆性高齢者に対するDTの有用性を確認するための系統的な研究に先立って、予備的検討を行ったので、その結果を報告する。

I. 対象と方法

対象：社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団特別養護老人ホーム（万寿の家）入所中の21名（男15名、女6名、年齢70歳以上）を対象とした。痴呆の程度はA式精神機能検査による判定で、軽度痴呆1名、中度痴呆4名、重度痴呆3名であった。

方法：日本レッスン協会で訓練を受けたセラピードッグ（以下TD）とドッグセラピストが、平均14年9ヶ月から平均12ヶ月にかけ、週1回老人ホームで訪れ、毎回30分のDTプログラムを計12回施行した。今回は高齢者とTDの交流が、高齢者の心理的な不安を軽減し、行動を抑制するためのセラピストの役割を必要最小限の指示をTDに与えることとにとどめた。

痴呆の程度により、被験者を2グループ各5名ずつにわけ、各グループに適したDTプログラムを行った。具体的な内容は次のようなものである。

①あいさつ：TDが高齢者1人ひとりの前を順に通り過ぎる際に、TDに触れながら「こんにちは」などのあいさつをする。

②キャッチボール：高齢者がボールを投げ、TDがボールを拾って次の高齢者に渡す。

③ブラッシング：ブラシでTDの毛並みを整える。

④お水やり：器に水を入れ、TDに与える。

⑤おやつあげ：TDに指示した動作をさせて、おやつを与える。

⑥リボン結び：TDの頭にリボンを結びつける。

治療効果の評価に、DT施行前にN式精神機能検査、DT施行前後および中間の計3回、GBSスケール（痴呆症状評価尺度）を本調査の目的に合わせて一部改変した評価尺度による日常行動評価、③毎回のDT実施中には、行動観察の目的で作成した評価尺度による行動評価を行った。

なお、N式精神機能検査および、DT実施中の行動評価については日本レッスン協会のドッグセラピストが行い、日常行動評価については万寿の家の介助スタッフが行った。
図2 日常行動観察

図3 日常行動観察項目別平均点

II．結果

1．N式精神機能検査

図1は DT 施行前と後の N式精神機能検査の結果を示したものである。DT 施行前と後の合計得点は、8人中2人が上昇、5人が低下、1人は変わらなかった。DT 施行前に高得点であった2人で、DT 後の得点が上昇した。もっとも上昇した人が20点、もっとも低下した人が22点の変動があった。

2．日常行動観察

図2は日常行動観察の結果を示したものである。日常行動観察は DT 施行前、DT4 頃目、DT 施行後と 3 回行っている。合計得点をみると、10人中8人が施行前より施行後の方が高くなってしまい、2人は施行後低下した。もっとも得点が上昇した人が23点、もっとも得点が低下した人が9点の変動であった。全被験者の平均は、DT 施行前 50.3点、DT4 週目 53.6点、DT 施行後 56.3点であった。

図3は全被験者の項目別平均点の推移を示したものである。DT4 週目に「会話」「集中力」「不安感」「焦燥感」で、急激な上昇がみられる。それ以外の項目に関しては、大きな変化はみられない。

DT4 週目的変化をみると、「意欲・活動性」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「表情・感情表現」で顕著な上昇が認められる。他の項目では 4 週目以後大きな変動はみられなかった。

DT 施行前後の得点差について、項目ごとに Wilcoxon 検定を行った。その結果、「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「焦燥感」の 6 項目において有意な差（p<0.05）が認められ、全項目の合計得点でも DT 施行前と施行後に有意な差（p<0.05）が認められた。つまり、「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「焦燥感」は DT 施行後、有意に改善されたといえる。

3．DT 中の行動観察

図4 は DT 中の行動観察得点を各被験者ごとにプロットし、その推移を示したものである。最低は 6 点、最高は 85 点である。得点の推移は被験者ごとに異なるが、平均を見ると、2 回目で急激に上昇し、その後、徐々に低下していき、最終回では初回とほぼ同じ得点になっている。

図5は全被験者の項目別平均点を各回プロットし、その推移を表したものである。「着座時間」に関しては、着座したままのプログラムが多かったため、ほとんど変化していない。その他の項目に
4. 症例

以下に DT で日常行動に顕著な改善が認められた 2 症例の概要を記す。

【症例1】T・Y 女性 84歳
診断：アルツハイマー型痴呆
既往症：左大腿骨骨折（左人工骨頭術）
障害状況：筋力低下、振戦あり、立位・歩行不安定なため車いすを使用
会話・音葉にとてもすることがあり、たどたどしく話す
記憶障害と見当識障害あり
時々失禁あり
家族歴・生活歴：同胞2人、第2子。子ども3人。
40歳位に夫と死別、それ以来、家政婦、料理店勤めなどで子供を育てて独立後、一人暮らし。80歳ごろより痴呆が始まり、入所した。
性格：何でも自分でやるという意識が強く、人の世話をよくし、公平に物事の判断をする。機嫌の良いときは冗談を交えて非常に明るい。幼いころは木登りが得意なおてんばだったとよく話す。手作業を好む。
処遇上の問題：人が話をしていると自分のことをいわれていると思い興奮したり、物がなくなると盗られたという被害妄想になり暴言をはく。被害妄想が強くなると、「預けてある金を全部出せ、宮崎県に帰る」といって事務所に行く。
経 過:

普段から帰宅欲求が非常に強く、 「家に帰りたい」と繰り返し訴え、徘徊を繰り返し、職員の対応を必要とすることが多かった。日常生活では強
い興奮、暗い表情が顕著であった。S さんは幼少のころ犬を飼っていたこともあり、TD への関心やプログラムの参加意欲は高かった。

初回から TD と積極的に触れ合い、DT 中は表情が明るく帰宅欲求もみられなかった。TD によ
り、飼っていた犬を背中におんぶして遊んでいた
ところを鮮明に思い出し、うれしくに繰り返し話
る場面がみられた。また、日常生活でも興奮や徘
徊などの対応時に TD の話をすると穏やかになり、
表情も豊かになった。他者への配慮も見受けられ
るようになってきた。近時記憶が難しく、DT の
翌日には TD が訪問していたことを覚えていなか
ったが、回を重ねることに TD の訪問がある程度
記憶に残る（2～3 日）ようになっていった。

DT 終了後、N 式精神機能検査では DT 施行前
に比し施行後に 22 点の低下。日常行動観察で
は、「意欲・活動性」「会話」「覚醒度」で顕著な改
善が認められた。DT 中の行動観察では、毎回ほ
ぼすべて満点で、慣れないは食べによるスコア
の低下はみられなかった。

【症例 2】Y・S 男性 71 歳
診 断：アルツハイマー型痴呆
既往症：聴覚障害（聾啞）簡単な手話、文字で会
話可能。意思疎通に困難なときがある。
聾啞（生理性）
障害状況：聴覚障害（聾啞）簡単な手話、文字で
会話可能。
下肢筋力低下のため車イスを使用
家族・生活歴：同胞 1 人、第 2 子。聾啞学校卒業
後、マッチ工場で働く。両親が死亡後、
単身で年金暮らしをする。64 歳ころより
徘徊あり、路上で倒れ入所となる。
性 格：几帳面でれい好きである。人が話して
いると自分のことをいわれていると思い
込むことがある。他者との話が困難なた
め、孤立し協調性もなく、消極的である。
処遇上の問題：他者とのコミュニケーションが十
分でないため、人が会話していると自分
の悪口をいわれていると誤解し、その人
に嫌がらせ、迷惑行為、いたずらをする。
他人の金銭を盗ったり、葉子やジュース
等を盗って食べることがある。他の人が
悪いことをしていると、逐一職員に報告
にする。

経 過:

普段は周りの人のコミュニケーションが困難
なため、誤解が生じやすく、孤立し、ストレスか
ら他の人に嫌がらせをするなどの問題行動がみら
れていた。

Y さんにとって、言葉の要らない関わりができ
る TD との触れ合いは大きな影響を及ぼした。ま
ず、TD との非言語的なコミュニケーションがで
きることによって、満足感が得られ、ストレスが
軽減された。さらに、TD で行することことで他の人
との関わりがスムーズになり、仲良し意識をもつよ
うに変わっていく様子がみられた。このことは日
常行動観察でも顕著に現れている。Y さんは DT
施行前、会話や集中力、覚醒度に乏しく、他者と
のコミュニケーションや活動性に問題があり、日
常行動観察得点は 48 点で低いほうであった。し
かし、DT4 回後の日常行動観察では、「意欲・活
動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「感情の表出」
で顕著な改善を示し、DT 施行後の日常行動観察
得点は 71 点となった。

Y さんはじめと日常行動に問題のある人では
なかった。しかし、コミュニケーションの障害の
ため、ストレスを生じ、それが問題行動や活動性
の低下として現れていたと考えられる。TD と出
会い、言語を介しないコミュニケーションの成立
によって、Y さん的情結は安定し、自尊心を回復
した。また TD が媒体となり、周りの人々とのコ
ミュニケーションが促進され、それが Y さんの覚
醒度を高め、表情も豊かになり、生き生きとした
生活を回復させたと思われる。
三. 考察

われわれは、痴呆性高齢者に対する DT を試みた。以下に、評価尺度ごとに若干の考察を加え、痴呆性高齢者に対する DT の問題点と課題について検討を加える。

1. N式精神機能検査

図1に示されたように、多くの被験者に DT 施行後の得点低下が認められる。これは被験者が痴呆性高齢者であることから、DT 施行前と後の約12週の間における自然低下ではないかと考えられる。反対に得点が上がった被験者は、DT 施行後の得点からも分かるように、もともと痴呆の程度が軽く、潜在的な能力があったと推測される。改善した項目は「年齢」(被験者No2, No9)「逆唱」(被験者No2)「月日」「物語再生」(被験者No9)である。DT 施行前には覚醒度や意欲低下のために、見かけ上、低スコアを示したものである。DT による覚醒度や意欲の改善に伴って、潜在能力が発揮され N式検査の成績も改善されたとみることができる。

しかし、日常行動観察の成績にみられるように、覚醒度や意欲の改善はN式検査の成績が改善しなかった被験者にもみられることから、DTによる知的機能の改善を期待できるのは、かなりの潜在能力ないしは、残存機能を有する者に限られると考えられる。

2. 日常行動観察

図2に示されたように、日常行動観察では多くの被験者で改善がみられた。その内容をみると(図3)とくに「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「焦燥感」「夜間の睡眠障害」では有意差が認められることから、DT の効果の中心がここにあると思われる。つまり、日中は意義が賦活され覚醒度が上がり、さまざまなことに意欲を示し、活動的になり、夜間には睡眠が充分とれるように日常生活のリズムが回復するようになる。

DT 開始後の日常行動の全般的な改善傾向は、DT4週目は緩やかな変化であるのに対し、4週目以後から大きな変化がみられたことから、DTの効果は長期間継続することで現れてくるものと考えられる。

観察項目ごとの改善過程をみると、「会話」「集中力」「不安感」などは早期に改善を示したのに対し、「覚醒度」「睡眠障害」などの改善は遅れて現れ、DT の効果が早期から認められるものと、回数を重ねたのに現れるものがある。

3. DT中の行動観察

図4をみると、DT の新奇性効果と「慣れ」の現象があることが分かる。つまり、初回では「普段見慣れないもの」に対する好奇心と戸惑いのうち過ぎながら、2回3回と回を重ねるごとに TDと会うことに楽しく覚える、DT 中の行動全般が活発になる。しかし、4回目になるとだいに TD に慣れるとともに、飽きが生じるものとみられる。とくにこのことが顕著にみられるのが「プログラム参加」への意欲である。回数を重ね DTに慣れ、目的感しさがなくなると自分から積極的にプログラムに参加しなくななる傾向を示す。これは、同じ DT プログラムが繰り返されるために次第に興味を失うものと考えられる。しかし、飽きがくることは、必ずしだ TDへの関心がなくなることを意味するのではなく（図5）、TDへの関心は最後まで保持されていた。

4. 痴呆性高齢者に対する DT の問題点と課題

今回われわれは、少人数の対象に対してではあるが、12週間わたる DTを施行し、「覚醒度」「意欲・活動性」「睡眠障害」「会話」「焦燥」「集中力」などに有意の改善を認めた。

痴呆の中核症状である知的機能低下に対しては、直接的な改善効果を認めることはできなかったが、「覚醒度」「意欲・活動性」などの改善と情緒の安
定化により、潜在的能力を発揮することができるようになる結果、知的機能が改善されるケースがあることが分かった。

しかし、DT 施行中の痴呆性高齢者の行動観察においては、DT の回を重ねるにつれて、プログラムへの参加や TD への接触に積極性が乏しくなる傾向が認められたのが、TD への関心や注意の持続には最終回までいちじるしい低下が認められなかったことは重要な示唆を含んでいる。すなわち、プログラムへの参加や TD に触れることには飽きて興味が乏しくなっても、TD の存在には関心や注意を向け続けてているのであるから、DT の実施方法やプログラム内容の工夫によって、好奇心をそそり、飽きや興味の喪失を防ぐことができれば、DT の効果をいっそう上げることが期待できる。

DT の問題点の 1 つは、対象者の犬に対する好意嫌いの点である。今回の対象者経過にあたっては、その点をとくに考慮しなかったが、対象者 10 名のうち犬を好まないものは 1 名のみであった。たとえ元来、犬を好まない場合でも、よく訓練された TD に会う回数を重ね、他の参加者が安全に TD に接しているのをみつめることにより、警戒心や恐怖は薄らい、だいに好奇心や関心をもつようになると考えられる。9)

今回の試みでは、効果判定のための評価尺度として、N 式精神機能検査、GBS を本研究の目的に合うよう一部改変したものおよび独自に作成した行動観察尺度を用いた。これらの評価尺度は今回の研究目的の達成には有用であったが、日常生活観察および DT 中の行動観察のための評価尺度は、今回の実験を生かして、さらに改良することが望ましい。

DT の有用性を調べる方法として、今回は DT 前後での比較を行ったが、厳密にいうと、ここで得られた結果は必ずしも純粋に TD 介在の効果を示しているとは限らない。それは、プログラムの実施にあたっては TD だけでなく、必ず TD とドッグセラビストとのペアで行われるからである。したがって、そのような形で行われる DT の効果は、TD とセラビストとのチームがもたらす効果であると理解しなければならない。

一般に痴呆性高齢者に対する治療の効果を判定する場合、治療期間が長ければ、その間における痴呆の進行を考慮しなければならない。今回の DT 実施期間は 12 週間であった。本研究の対象者は 10 名のうち 8 名は、DT 後、N 式精神機能検査で DT 前より低値を示した。この成績は一見、DT が痴呆性高齢者の知的機能の改善に有用であることを示すが、DT を施行しなければ、より大きな低下があったかもしれない可能性を否定することはできない。したがって今後、痴呆の自然経過による能力低下を考慮に入れた評価方法を検討する必要がある。

本研究で示されたように、週 1 回の DT 施行により、痴呆性高齢者の日常行動全般にわたる改善効果が認められたが、その効果が比較的早期に出現するものと、遅れて現れるものとがあることは興味深い。「不安・焦燥」「集中力」「会話」などは DT 開始後 4 週目にかなりの改善を示し、それより遅れて「意欲・活動性」「覚醒度」「睡眠」などの中程度の改善が認められた。このような DT の効果発現の時期の違いが生じる理由の検討も DT の有用性を高めるために必要である。

結 語

わが国における DT の経験はまだ多いとはいえないし、DT の有用性についての計量的な検討も十分ではない。そのような状況下で、今回、われわれは痴呆性高齢者に対する DT の有用性について系統的な研究に取り組む予備的段階として、多数例についてあるが、計量的な検討を行い、DT の有用性を確証できる成績を得た。今後は本研究の成績と経験を踏まえて、多数例につき、より広範で精確な検討を行いたい。

さて、痴呆性高齢者のケアにはケアに関わるすべてのスタッフの多大のエネルギーを要する。最近、DT が直接の対象となる高齢者だけでなく、
DT やケアに関わるスタッフの行動にも変容をもたらすことが指摘されていることから、DT とスタッフの行動、意欲、感情などとの関係を明らかにすることも、DT の有用性をより広い視野で評価するうえで意義があると考える。

【文 献】
1) 岩本隆誠，福井至：アニマルセラピーの理論と実際，1-4，培風館，東京（2001）。
4) 金森雅夫，鈴木みずえ，山本清美，ほか：痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究。日本老年医学会雑誌, 38(5) : 659-664 (2001)。
5) 内藤智道，渡辺雅明，大林公一，ほか：精神科患者における動物介在療法に対する意識調査。臨床精神医学，31(6) : 675-679 (2002)。
6) 加藤信介，菅谷公秀：動物介在療法の導入による集団性の変容過程：老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグ・セラピーの事例。実験社会心理学研究，41(2) : 67-82 (2002)。

A trial of dog-assisted therapy for elderly people with Alzheimer’s disease

Mitsuhiro Mano*, Madoka Uchizono**, Tsuyoshi Nishimura***

*1Japan Rescue Association, **2Graduate School of Humanities Koshien University,
***3The College of Humanities Koshien University

The paper reports on a trial of dog-assisted therapy (DAT) for elderly people with Alzheimer’s disease. Study subjects were ten elderly residents (72-92-year old) with Alzheimer’s disease in a care facility. The dog-assisted therapy session was consisted of approximately thirty minutes semistructured recreation session with a therapy dog and a dog trainer. Outcome was measured by comparisons of pre- and post-DT scores of N-dementia scale, GBS scale with a partial modification, and a behavior scale specially provided for this study. After the twelfth DT session, some of psychological or behavioral problems such as drowsiness, anxiety, and insomnia were markedly improved. While active attitude toward participation in DT was gradually weaken after the fourth session, attention and interest to the therapy dog were kept well to the last session. The result indicates that DT is useful to improve activities and emotional state of elderly people with dementia. Consequently, it is suggested that for DT to be able to continued without loosing interest of participants for a long period, gradual change in the recreation programs is desirable as the session progresses.

Key words: dog therapy, care, dementia